【論　　文】

英語の結果構文における「程度」読み解釈に関する一考察*

阿　部　明　子

1. はじめに

英語の結果構文では通常、結果句が必ず目的語を叙述するという「直接目的語制約（Direct Object Restriction）」が課される（cf. Levin and Rappaport Hovav (1995)）。したがって、以下の（1）と（2）でそれぞれ現れているような他動詞と非対格動詞の場合に加え、非能格動詞であっても、（3）の例のように擬似目的語をとる場合には、問題なく生起することができるとされている[1]。

（1）a. He painted the wall red.
　　b. He broke the vase into pieces.
（2）a. The ice cream froze solid.
　　b. The vase broke into pieces.
（3）a. The joggers ran the pavement thin.
　　b. She worked her head off last night.

ただし、他動詞・非対格動詞が生起する（1）（2）と非能格動詞が生起する（3）の間には、その解釈に関して決定的な違いが存在するとされ、Goldberg (1995) 等によれば、（3）の結果構文（本稿では、このタイプを非能格結果

* 貴重なご助言をくださった本学会の査読委員の先生方に心より感謝申し上げる。本稿ですべてのご意見にお応えできたわけではないが、有り難く今後の研究の参考にさせていただきたい。なお本論における不備は、すべて筆者の責任によるものである。

『英語と文学、教育の視座』192-203

構文と呼ぶ）は、(1)･(2) の結果構文と異なり、実際の状態変化を表しているよりはむしろ、程度表現として解釈されるという（(3b) に関しては一般的にBody-part *Off* 構文と呼ばれるが、本稿では結果構文の一種として扱う）。この特異な振舞いに対し、先行研究では、非能格結果構文を一種のイディオムとして分析したり、「程度」読みが生成されるための語用論的制約が提案されたりしてきたが、その本質は明らかとなっていない。(cf. Jackendoff (1997), Sawada (2000), 影山 (2007))[2]。本稿では、「程度」読み解釈がなぜ非能格結果構文でのみ生じるのかということについて改めて考察することを目的とする。具体的には、非能格結果構文において「結果」読みと「程度」読みが生じるとされる特徴は、英語の副詞節を伴う構文で観察される一般特性から生じるものであるという可能性を提示する。

2. 事実観察

非能格結果構文は「結果」読み、つまり実際の状態変化を表す文字通りの解釈に加えて、「程度」読みの解釈が可能である。都築・足立 (2010) によると以下の (4) の例文は、(5) のような結果を表す通常の読みのほかに、(6) のような「程度」読みとして解釈できるという。

(4) a. He yelled himself hoarse.
　　b. John shaved his razor dull.
　　c. The joggers ran their Nikes threadbare.
(5) a. 彼は叫びすぎて声がかれてしまった。
　　b. ジョンは何度もひげを剃ったので剃刀がきれなくなった。
　　c. ジョギングをしすぎてナイキの運動靴がぼろぼろになった。
(6) a. 彼は声がかれるほど何度も叫んだ。
　　b. ジョンは剃刀がきれなくなるほどひげを剃った。
　　c. ナイキの運動靴がぼろぼろになるほどジョギングした。

（都築・足立 2010: 134-136）

そして、(6) の「程度」読みについて都築・足立 (2010) は、「補語は動詞を修飾する副詞的な役目をしており、対象が結果状態に至ることは含意されて

いない」と述べている。

同様に、Miyata (2004) も、以下の（7）に示した結果構文に関して、2 通りの解釈が可能であるとしている。

（7）a. Mary ate herself sick. (Miyata 2004: 35)
b. He cried his eyes red. (ibid.: 54)

（7a）は「食べすぎた結果、具合が悪くなった」という結果の解釈と、「具合が悪くなるほど食べた」という程度の解釈が可能で、程度の解釈には必ずしも「実際に具合が悪くなった」ということは含意されない。また、（7b）においても「泣いた結果、目が赤くなった」という結果の解釈と、「目が赤くなるほど泣いた」という程度の解釈が可能であり、（7a）と同様、程度読みの場合は「実際に目が赤くなった」という結果状態は含まれない。

それに対して、Body-part *Off* 構文は、非能格動詞のみと共起可能であるとされ、先行研究において比喩的な誇張表現としてしばしば用いられるとされてきた。

（8）a. Susan worked/swam/danced her head off last night.
b. Fred talked his head/his ass/his butt off, but to no avail.
(Jackendoff 1997: 551)

（8a）は「頭が取れるほど必死に働いた/泳いだ/踊った」という誇張表現であり、（8b）も同様に「頭/尻が取れるほどものすごく話したが、無駄だった」と強意の用法として解釈される。しかしながら工藤（2011）によれば、Body-part *Off* 構文でさえ適切な文脈で用いられた場合には、「結果」読みが可能になるという。

（9）a. The android was half-broken, but the engineer recklessly kept using it for making sports clothes. As a result, the machine finally sewed its fingers off, and they dropped under sewing machine.
b. John, who is actually an alien, is really bad at studying. When the final exam was coming, he finally studied his head off, and his friends

passed out upon seeing it on the floor. （工藤 2011: 96）

（9a）と（9b）では「結果」読みが可能で、それぞれ「縫物をした結果、アンドロイドの指が取れた」という解釈と「勉強をした結果、エイリアンの頭が取れた」という解釈がなされることになる[3]。

以上の観察をまとめると、本来、目的語を選択しない非能格動詞が擬似目的語をとり、非能格結果構文（Body-part *Off* 構文を含む）に生起する場合には、常に「結果」読みと「程度」読みの間で解釈の曖昧性が生じ、具体的にどちらの解釈が選択されるかは、それが生起する文脈により決定されることになると言うことができる[4]。

3. 考察

2節では、非能格結果構文において実際には、「結果」読みと「程度」読みの間で解釈の曖昧性が存在するということを見てきたが、このような解釈の曖昧性は、決して一部の結果構文のみに限られたものではない。たとえば、「too … to構文」や「so … that構文」では、2節で観察した非能格結果構文と同様に、「結果」読みと「程度」読みの間で解釈が曖昧になることが知られている。

（10）a. John was too tired to walk.
b. John was so tired that he couldn't walk. （都築・足立 2010: 136）

都築・足立（2010）によると、（10）の「too … to構文」と「so … that構文」において、「ジョンはもう歩けないほど疲れた」という「程度」読み解釈と「ジョンは疲れすぎていて、もう歩けなかった」という「結果」読み解釈という二通りの解釈が可能であるという。また、次の例文についても、同様のことが言える。

（11）a. He is so rich that he can buy a car.
b. The problem is too difficult for him to solve.

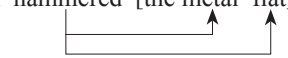
（11a）では、「彼は金持ちなので車を買うことができる」という結果の解釈と、「彼は車が買えるくらい金持ちだ」という程度の解釈ができ、（11b）においても、「その問題は難しすぎて彼には解けない」という結果の解釈と、「その問題は彼に解けないほど難しい」という程度の解釈が可能である。

このように、解釈の曖昧性は、決して非能格結果構文でのみ観察されるものではなく、「too … to構文」における不定詞節や「so … that構文」におけるthat節など、いわゆる副詞節において観察されるものである[5]。そこで本稿では、なぜ通常の結果構文にはない解釈の曖昧性が、非能格結果構文でのみ観察されるのかという問題を、この英語の副詞節が示す解釈の曖昧性と関連づけながら説明する方法を探っていきたい。2節でも指摘した通り、都築・足立（2010）は、「動詞の表す行為の程度のはなはだしさを表す強意読みの場合、補語は動詞を修飾する副詞的な役目をしており、対象が結果状態に至ることは含意されていない」と述べている。この考えに基づき本稿では、動詞の後に続く名詞句と結果句が副詞的な役割を果たしていると考え、非能格結果構文の意味関係を以下のように仮定する。

（12）the joggers ran [the pavement thin]

この意味関係において、動詞後の要素は副詞的な働き、つまり、付加詞（Adjunct）として一まとまりをなし、主節が表す「行為」を修飾している（cf. Jackendoff (1990), Carrier and Randall (1992), Miyata (2004)）[6]。先に述べたように、付加詞は解釈の曖昧性が生じることになるため、非能格結果構文では、その付加詞の存在により「結果」と「程度」の間で解釈が曖昧になる。一方で、他動詞・非対格動詞型の一般的な結果構文では、以下に示すように、動詞後の名詞句と結果句はそれぞれ、動詞によって意味的に選択されている要素、すなわち補部として機能している（cf. Carrier and Randall (1992), 加賀（2007））[7]。

（13）John hammered [the metal flat]



以上、本稿では、「程度」読み解釈が可能である非能格結果構文に関して、「程度」読みが可能なのは、動詞後の要素が「程度」読みと「結果」読みの両方の解釈を許す副詞節のような機能を果たしていることによるのではないかという可能性を提示した。このように分析することにより、非能格結果構文が示す、他動詞・非対格動詞型の結果構文との相違点に対して次のような説明を与えることが可能となる。

まず一つ目の相違点は、結果句の生起制限に関する非対称的な振舞いである。Wechsler (2005) によると、以下（14a）において「結果」読みのみを許す他動詞型結果構文の結果句には現れることができないwetが、「程度」読みを許す非能格結果構文の（14b）には生起できるという[8]。

（14）a. He wiped the table {clean/dry/*wet/*dirty}.
b. Freddy cried the handkerchief wet.

この振舞いの違いに関して、他動詞・非対格動詞型の結果構文では結果句が動詞によって意味的に選択される補部として機能するために、その生起に関しても動詞により厳しく制限されることになるのに対し、「程度」読みを許す非能格結果構文では、動詞後の要素が動詞により意味役割を付与されていない付加詞として機能することにより、そのような動詞による生起制限が課されない[9]。

次に二つ目の現象として、Wh句の抜き出しに関する非対称性があげられる。Ike-uchi (1994) によれば、以下の（15）と（16）で示されているように、結果構文において、動詞後の要素を抜き出せるかどうかは一様ではないという[10]。

（15）a. How flat did the gardener water the tulips *t*?
b. Which tulips did the gardener water *t* flat?
（16）a. ?*How thin did joggers run [the pavement *t*]?
b. ? Which part of the pavement did joggers run [*t* thin]?
(Ike-uchi 1994: 369-370)

（15）の他動詞結果構文では、動詞の後に続く名詞句と形容詞句のいずれに

も、Wh移動を適用させることができるのに対し、（16）の非能格結果構文ではそれが許されない。同様の振舞いは、以下に示したような副詞節で一般に観察される。

（17）a. *How did you leave [before fixing the car *t*]?
b. *What do you want to sit nearer the front [because you can't see *t*]?
（今井・中島 1978: 125）

（17）ではそれぞれ、時と理由を表す副詞節の中からWh要素を抜き出すことができない。この副詞節が示す一般的な特性を考慮すると、本分析は、（15）と（16）の抜き出しに関する非対称的な振舞いに対して、他動詞・非対格動詞型の結果構文では、動詞後の要素が補部として機能しているために抜き出しが可能である一方で、「程度」読みを許す非能格結果構文では、動詞後の要素が全体として付加詞として機能しているために、抜き出しが許されないと説明することができる。

以上、本節では、非能格結果構文における「程度」読みと「結果」読みの曖昧性は、英語の副詞節が持つ一般特性に由来するという分析の可能性を提示し、それにより、「結果」読み解釈のみを許す、他動詞と非対格動詞が生じる結果構文との異なる振舞いに対しても説明できることを示した。

4.「程度」読み解釈の分布

前節では、非能格結果構文と他動詞・非対格動詞型の結果構文の異なる振舞いについて説明したが、本節ではさらに、「程度」読み解釈がなぜ非能格結果構文にのみ生じるのかという問題に対しての説明を試みたい。

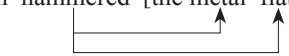
1節で述べたように、「程度」読み解釈はどのような結果構文でも一様に観察されるものではなく、非能格動詞が本来意味的に選択しない擬似目的語を選択した場合に限られ、他動詞結果構文や非対格結果構文ではそれが許されないとされる。たとえば、以下に示した例を見てみよう。

（18）a. John broke the door open.
b. The vase broke into pieces.

（18a）は他動詞が生じている結果構文であるが、その解釈は、「ジョンがドアを壊した結果、そのドアが開いた状態になった」という字義通りの解釈しか許されず、必ず状態変化が意味される。（18b）は非対格結果構文であり、（18a）と同様、「花瓶が壊れて粉々になった」という結果の解釈のみ可能であり、必ず状態変化が起きている。

この事実に対して本分析は、他動詞・非対格動詞型の結果構文において、動詞後の名詞句は以下の（19）で示されているように、動詞により意味役割が付与されることで、動詞との間で選択関係を確立してしまう結果、動詞後の要素が付加詞として解釈されることができないために、「程度」読み解釈がなされないと説明することができる。

（19）John hammered [the metal flat] (=(13))



このように、本稿では、動詞後の名詞句に対して動詞が意味役割を付与しているかどうかという観点から、「程度」読み解釈の有無の説明をすることになる。そして、他動詞が本来意味的に選択しない目的語をとっている場合に、「程度」読み解釈が生じるという事実に対しても説明を与えることができる。

（20）They drank the pub dry.　（都築・足立 2010: 134）

都築・足立（2010）によれば、（20）の結果構文では、「彼らが大いに酒を飲んだことで、そのパブの酒がなくなってしまった」という「結果」読み解釈と、「そのパブの酒がなくなるほど、彼らは大いに飲んだ」という「程度」読み解釈の両方が可能であるという。この事実に対し、本分析では、本来drinkはその目的語として「飲む対象」を選択する他動詞であるものの、（20）において、the pubは「飲む対象」として解釈されることができず、他動詞drinkとの間で選択関係を確立しているとは言えない。その結果、その名詞句を含めた動詞後の要素が付加詞として解釈可能となるため、「程度」読みと「結果」読みの両解釈が生じ得ると説明することができる。

5. まとめ

本稿では、なぜ「程度」読みがBody-part *Off* 構文を含む非能格結果構文に限定されるのかということについて改めて考察した。「程度」読みと「結果」読みの両方の解釈が可能なのは、英語の副詞節を伴う他の構文にもみられることを示し、英語の副詞節が示す解釈の曖昧性から非能格結果構文における2つの解釈の曖昧性が生じているという可能性を提示した。

注

1. Rappaport Hovav and Levin (2001) では、例えばShe kicked free.のように、非能格動詞でも擬似目的語を伴わないで結果構文に現れる場合があることを指摘している。本稿では、「直接目的語制約」に従うデータのみを分析対象としているため、このような明らかな違反が見られるデータの扱いに関しては、今後の課題としたい。
2. 具体的にJackendoff (1997) は、「程度」読みが可能なBody Part *Off* 構文に関して、以下のような定式化を行い、一種のイディオムとして分析している（cf. 影山（2007））。
   （i） a. [$_{vP}$ V [bound pronoun]'s head off]
   b. 'V intensely' (Jackendoff 1997: 554)
   しかしながら、これらの分析では、Sawada (2000) が指摘しているように、以下に示されるような「程度」読みが可能な結果構文の生産性を説明することができない。
   （ii） a. She played her fingers off (on the piano).
   b. She danced her feet off (at the party last night). (Sawada 2000: 364-365)
   なお、Sawada (2000) は以下に示した語用論的制約を提案し、「程度」読みの生成を説明している。
   （iii） a. Avoid an interpretation against the knowledge of body part integrity.
   b. Seek another way of interpretation, if available.
   c. Interpret the postverbal sequence as an intensifying complex.
   (Sawada 2000: 376)
3. Hoeksema and Napoli (2008) によれば、通常「強意」読みがなされる「the hell out of 構文」もまた、高度に文脈依存ではあるものの、「結果」読みが可能であるとしている。
   （i） Yes, Loubitza will beat the devil out of her when she gets her home – her and her broken jar! (Hoeksema and Napoli 2008: 371)
   （i）では、「悪魔祓い」の文脈で用いられているが、「彼女の体内に潜む悪魔

をたたき出す」という字義通りの読みが問題なく可能である。

4. 工藤（2011）は、非能格結果構文、Body-part *Off* 構文、the hell out of 構文のイディオム性を分析し、それらの構文間ではイディオム性に関して違いがあるとしたうえで、イディオム性が強まる程、「程度」読みがなされる傾向が強くなるとしている。
5. 解釈の曖昧性は、分詞の副詞的用法である、いわゆる分詞構文でも確認される。

（i） Having finished (= After/As I had finished) my work, I went out for a walk.
（安藤 2005: 244）

安藤（2005）によると、(i) は「仕事を済ませてから、散歩に出かけた」という「時」の解釈と、「仕事を済ませたので、散歩に出かけた」という「理由」の解釈が生じるという。(i) の分詞構文が「時」、「理由」の解釈を有することからも明らかなように、英語の副詞節は必ずしも「結果」と「程度」の間で解釈が曖昧になるわけではない。なぜ非能格型結果構文では「結果」と「程度」の間で解釈が曖昧になるのか、また、なぜ分詞構文では「時」や「理由」等の間で解釈が曖昧になるのかについては今後の課題としたい。

6. 査読者より、(12) の付加詞に関して、統語範疇はどのようなものを想定し、構造上、どの位置に付加されるのかという質問を受けた。構造の詳細については、今後の検討課題とする。
7. 動詞がそれに続く名詞句との間で選択関係を確立しているかどうかは、形容詞受身や中間構文の形成に関する観点から確かめることができる。大庭（2008）によれば、形容詞受身や中間構文等の変形操作の適用は、動詞によって意味役割が与えられた項にのみ可能であるとされるが、以下の (i) と (ii) で示されているように、「結果」読み解釈のみを許す他動詞結果構文では、形容詞受身や中間構文を問題なく形成することができるのに対し、「程度」読み解釈を許す非能格結果構文では、(iii) と (iv) で示されているように、それらが許されない。

（i） a. a wiped-clean table
　　 b. a pounded-flat metal
（ii） a. This table wipes clean easily.
　　 b. The metal pounds flat easily.
（iii） a. *the run-thin pavement
　　 b. *a ticked awake baby
（iv） a. *This type of pavement runs thin easily.
　　 b. *This baby ticks awake easily. (L and RH 1995:43)

8. Wechsler (2005) は、この振舞いの違いをスケールの観点から説明する。Vanden Wyngaerd (2001) によると、結果構文は一般に、結果句が有界のスケールを

表さなければならないとする有界性制約に従うため、閉鎖スケールの結果句しか生起することができないとされるが、Wechsler (2005) は、「程度」読みが可能な非能格結果構文はこの制約に従わないとしている。なお、Wechsler (2005) は、結果構文をコントロール型（目的語が動詞によって語彙的に選択されている結果構文）とECM型（目的語が動詞によって語彙的に選択されていない結果構文）に分類しているが、「程度」読みが許される非能格結果構文はECM型に対応する。

9. Washio (1997) や岩田（2012）においても（14a）の振舞いの差異について、動詞の意味の観点から説明をしている。
10. （15a）の文法性の判断に関して、Kuno and Takami (1993: 66) や高見（1997: 34）では異なった判断をしているが、なぜこのような文法性の違いが生じるのかについては、今後の課題としたい。

参照文献

安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』東京: 開拓社.

Carrier, Jill and Janet Randall (1992) “The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives.” *Linguistic Inquiry* 23: 173-234.

Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Hoeksema, Jack and Donna Jo Napoli (2008) “Just for the Hell of It: A Comparison of Two Taboo-Term Constructions.” *Journal of Linguistics* 44: 348-378.

Ike-uchi, Masayuki (1994) “English Resultative Constructions and *Wh*-movement.” Shuji Chiba et al. (eds.) *Synchronic and Diachronic Approaches to Language*, 361-377. Tokyo: Liber Press.

今井邦彦・中島平三（1978）『文Ⅱ』東京: 研究社.

岩田彩志（2012）『英語の仕組みと文法のからくり―語彙・構文アプローチ―』東京: 開拓社.

Jackendoff, Ray (1997) “Twistin’ the Night Away.” *Language* 73: 534-559.

加賀信広（2007）「結果構文と類型論パラメータ」小野尚之編『結果構文の新展開』177-216. 東京: ひつじ書房.

影山太郎（2007）「英語結果述語の意味分類と統語構造」小野尚之編『結果構文研究の新視点』33-65. 東京: ひつじ書房.

工藤俊（2011）「強意解釈を得る構文イディオムの階層性―フェイク目的語結果構文、Body Part *Off* 構文、V *the hell out of* 構文を中心に―」『英語語法文法研究』第18号、94-109.

Kuno, Susumu, and Ken-ichi Takami (1993) *Grammar and Discourse Principles: Functional Syntax and GB Theory*. Chicago: University of Chicago Press.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA.: MIT Press.
三原健一（2003）「普遍文法と日本語―結果構文を題材として―」北原保雄編『文法Ⅰ』（朝倉日本語講座 5）東京: 朝倉書店.
Miyata, Akiko (2004) *Focalization in Clausal Relations: A Study of Resultative and related Constructions in English*. Doctoral dissertation, University of Tsukuba.
大庭幸男（2008）「結果構文の構造とその派生方法について」金子義明他編『言語研究の現在―形式と意味のインターフェース』134-153. 東京: 開拓社.
Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An Event Structure Account of English Resultatives." *Language* 77: 766-797.
Sawada, Shigeyasu (2000) "The Semantics of the 'Body Part off' Construction." *English Linguistics* 17: 361-385.
高見健一（1997）『機能的統語論』東京: くろしお出版.
都築雅子・足立公也（2010）「結果構文」足立公也・都築雅子編『学校文法の語らなかった英語構文』123-144. 中京大学文化科学研究所.
Vanden Wyngaerd, Guido (2001) "Measuring Events." *Language* 77: 61-90.
Washio, Ryuichi (1997) "Resultatives, Compositionality and Language Variation." *Journal of East Asian Linguistics* 6: 1-49.
Wechsler, Stephen (2005) "Resultatives under the 'Event-Argument Homomorphism' Model of Telicity." Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport (eds.) *The Syntax of Aspect: Deriving Thematic and Aspectual Interpretation*, 255-273. Oxford: Oxford University Press.

（和光大学）
abe@wako.ac.jp